メディア・情報・コミュニケーション研究テンプレート：Ver.1.03

JMIC Word template: Ver.1.03

要約

　本稿はメディア・情報・コミュニケーション研究に投稿する論文のテンプレートである。このテンプレートのタイトル，著者名，所属，見出し，本文などはあらかじめフォントの種類，フォントのサイズなどの書式が設定されている。この書式を崩さずに入力すれば，定められた形式で執筆することができる。見出しの場合，全角のフォント（和文フォント）はMSゴシック，半角英数字のフォント（英文フォント）はArialを用いる。本文等の場合，全角のフォント（和文フォント）はMS明朝，半角英数字のフォント（英文フォント）はTimes New Romanを用いる。和文要約は300文字程度とする。

Abstract

English abstract should not exceed 120 words.

キーワード

オープンアクセス，メディア，情報，コミュニケーション，執筆要領，5­個から7個

Keywords

Open access, Media, Information, Communication, 5–7 keywords

1. はじめに

本文の執筆において，読点は「，」（全角コンマ）を用いる。句点は「。」を用いる。各段落は行頭1字下げとする。全角のフォントはMS明朝，半角英数字のフォントはTimes New Romanを用いる。

原稿には和文題目，英文題目をつける。それぞれに副題をつける場合はコロンで区切る。

英文題目と和文要約の間にある4行の空白はそれぞれ和文著者名，英文著者名，和文所属名，英文所属名を記すための空行である。査読はダブルブラインドで行うため，投稿時には空白のままにしておくこと。

2. このテンプレートの使い方

2.1. 書式の設定

このテンプレートでは，各要素のフォントの種類，フォントサイズ，段落前および段落後の間隔，行間などがあらかじめ設定されている。この書式を崩さずに入力することで，定められた形式で原稿を執筆することができる。

見出しに関して，文字数が1行の文字数を超過し，2行以上必要になる場合には，適当な箇所で段落に分けない改行（Shift + Enter）を挿入し，見やすいように各自調整する。

2.2. スタイル機能

このテンプレートファイルではWordのスタイル機能を利用して，各要素の書式を保存してある。したがって，スタイル機能を用いることで定められた書式を適用することもできるので，必要に応じて用いてほしい。

2.3. 設定されていない要素の書式

見出しの書式は章（例えば，1. はじめに）および節（例えば，2.1. 書式の設定）までを設定してある。それよりも下のレベルで見出しを用いる場合には，節の見出しと同様の書式を用いるか，段落の頭につけて，本文の前に全角スペースを1文字分，挿入する。例えば次の段落のような書き方である。

項よりも下のレベルの見出しの例　ここでは段落のうち，本文の前に挿入する形式での見出しの付け方を説明する。全角のフォントはMSゴシック，半角英数字のフォントはArialを用いる。本文との境には全角スペースを1文字分，挿入する。

3. 原稿執筆の手引

3.1. 分量

いずれの原稿も著者作成稿の段階では15ページ以内を原則とする。ただし，事務局で作成する掲載稿の段階で15ページを超過することはありうる。

3.2. 原稿の形式

研究論文の場合　研究論文の場合は，問題，方法，結果，考察を基本的な構成として執筆する。

技術資料の場合　技術資料の場合は，紹介する技術・ツール等の背景と目的，紹介する技術・ツール等の内容説明，紹介する技術・ツール等の適用事例，まとめを基本的な構成として執筆する。

3.3. 図表

図表を用いる場合には中央寄せで配置する。なお，図表で用いる画像は原稿のファイルサイズが大きくなる原因となるので，鮮明さとファイルサイズのバランスを考慮して作成する。

図1で例示されるように図（グラフ，写真，画像等）の中で用いる文字は著者が適切なフォントや文字サイズを指定してよいが，可読性を考慮して指定する。図にはすべてに題をつけ，図1，図2のように連番号を題の前につける。図の連番号および図の題は図の下につけ，全角のフォントはMS明朝，半角英数字のフォントはTimes New Romanを用いる。フォントサイズは10ptとする。

表1で例示されるように表の中で用いる文字は，全角のフォントはMS明朝，半角英数字のフォントはTimes New Romanを用いる。フォントサイズは10ptが望ましい。表にはすべてに題をつけ，表1，表2のように連番号を題の前につける。表の連番号および表の題は図の下につけ，全角のフォントはMS明朝，半角英数字のフォントはTimes New Romanを用いる。フォントサイズは10ptとする。表の縦罫はなるべく利用しない。

図1　図の例

表1 表の例

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 変数 | 最小値 | Q1 | 中央値 | Q3 | 最大値 | 四分領域 |
| v1 | 2.00 | 3.00 | 3.00 | 4.00 | 5.00 | 0.50 |
| v2 | 1.00 | 3.00 | 3.00 | 4.00 | 5.00 | 0.50 |
| v3 | 1.00 | 3.00 | 3.00 | 4.00 | 5.00 | 0.50 |
| *N*=200 |  |  |  |  |  |  |

3.4. 注をつける場合

注は必要最低限のものだけをつける。注を用いる場合は脚注とし，全角のフォントはMS明朝，半角英数字のフォントはTimes New Romanを用いる。フォントサイズは10ptとする。

3.5. ヘッダー・フッター

ヘッダーとフッターは掲載決定後に編集するので，原稿作成時にはそのままにする。

4. 引用文献の書き方

4.1. 本文中での引用

著者が1名の場合　本文中での引用は，著者名（姓）と出版年を示す。

本文中に文章として入れる場合は次のように書く。宮田（1993）は…。Castells (2009) によれば…。

括弧内に文献を示す場合は次のように書く。例えば，…とされる（宮田, 1993）。また，…といわれる（Castells, 2009）。

著者が2名の場合　著者が2名の場合は，引用ごとに両著者の姓を書く。両著者の姓の間は，日本語では中黒（・），英語では”&”で結ぶ。

本文中に文章として入れる場合は次のように書く。三浦・川浦 (2008) は…。Ellison & Boyd (2013) によれば…。

括弧内に文献を示す場合は次のように書く。例えば，…とされる（三浦・川浦, 2008）。また，…といわれる（Ellison & Boyd, 2013）。

著者が3名以上5名以下の場合　著者が3名以上の場合は，初出の際に引用ごとに両著者の姓を書く。両著者の姓の間は，日本語では中黒（・），英語では，姓の間を半角コンマと半角スペースで区切り，最後の著者名の前にはコンマと半角スペース，”&”をおいて結ぶ。2回目以降の引用の際には第1著者の姓以外を，日本語では「ほか」，英語表記では”et al.”と略す。

本文中に文章として入れる場合は初出の場合，次のように書く。橋元・北村・辻・金（2011）は…。Peer, Vosgerau, & Acquisti (2014) によれば…。2回目以降の場合は次のように書く。橋元ほか（2011）は…。Peer et al. (2014) によれば…。

括弧内に文献を示す場合は初出の場合，次のように書く。例えば，…とされる（橋元・北村・辻・金, 2011）。また，…といわれる（Peer, Vosgerau, & Acquisti, 2014）。2回目以降の場合は次のように書く。例えば，…とされる（橋元ほか, 2011）。また，…といわれる（Peer et al., 2014）。

著者が6名以上の場合　著者が6名以上の場合は，初出の際も2回目以降の引用の際には第1著者の姓以外を，日本語では「ほか」，英語表記では”et al.”と略す。

本文中に文章として入れる場合は次のように書く。鳥海ほか（2014）は…。Kraut et al. (1998) によれば…。

括弧内に文献を示す場合は次のように書く。例えば，…とされる（鳥海ほか, 2014）。また，…といわれる（Kraut et al., 1998）。

同一箇所に2つ以上の文献を示す場合　同一箇所に2つ以上の文献を示すときは，（）内に著者姓のアルファベット順に並べ，半角のセミコロン（;）と半角スペースで区切る。なお，同一著者の文献を同一箇所で複数ある場合は，出版年を半角コンマと半角スペースで区切って年次順に並べる。

同一著者かつ同一出版年の文献を引用する場合　同一著者かつ同一出版年の文献を引用する場合は，出版年の後にa, b, c, …をつけて，それぞれの文献を区別する。

翻訳書を引用する場合　翻訳書を引用する場合は，最初に原典の著者名，出版年を書き，そのあとに翻訳書の訳者名（姓）に「訳」を付け，出版年を書く。例えば，Putnam (2000 柴内訳2006) によれば…。さらに，…とされる（Putnam, 2000 柴内訳 2006）。

4.2. 引用文献リスト

引用文献リストは原稿の最後に見出しを「引用文献」として，つける。引用文献リストでは原稿のなかで引用したもののみを含め，著者姓のアルファベット順に並べて示す。同一人物による単著の文献と，第1著者として共著の文献とがある場合は，単著の文献を先に示し，共著の文献をそれに続ける。

第1著者が同一で，第2著者が異なる場合は，第2著者姓のアルファベット順に並べる。第3著者以降で初めて異なる著者となる場合にも，同様の考え方を適用する。

同一著者の文献が複数ある場合は，年次の古いものから順に並べる。同一出版年のものがある場合は，本文で引用した際に付したa, b, c, …の順に並べる。

著者8名以上の文献（e.g. Baker et al., 2010; 坂野ほか, 1994）は第1から第6著者まで書き，途中の著者は「…」を省略記号として挿入し，最後の著者名を加える。

デジタルオブジェクト識別子（digital object identification: DOI）のある文献に関しては、含めることを強く推奨する。

書き方に関しては，本稿末の引用文献で例示されている形式に従う。該当する例示がない場合には，日本心理学会「執筆・投稿の手びき（2015年版）」（日本心理学会機関誌等編集委員会, 2015）のpp. 38–48を参考にする。

謝辞

謝辞を記す場合は，本文と引用文献の間に入れる。謝辞の見出しには番号を付さない。

引用文献

Castells, M. (2009). *Communication power*. New York: Oxford University Press.

Baker, R., Blumberg, S. J., Brick, J. M., Couper, M. P., Courtright, M., Dennis, J. M. , ... Zahs, D. (2010). Research synthesis AAPOR report on online panels. *Public Opinion Quarterly*, *74*, 711–781. doi:10.1093/poq/nfq048

Ellison, N. B., & Boyd, D. M. (2013). Sociality through social network sites. In W. H. Dutton (Ed.), *The oxford handbook of Internet studies* (pp. 151–172). New York: Oxford University Press.

橋元良明・北村智・辻大介・金相美 (2011). 情報行動の全般的傾向　橋元良明（編）　日本人の情報行動2010（pp. 9–121）　東京大学出版会

Kraut, R., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Mukophadhyay, T., & Scherlis, W. (1998). Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being?. *American Psychologist*, *53*(9), 1017–1031. doi:10.1037/0003-066X.53.9.1017

三浦麻子・川浦康至 (2008). 人はなぜ知識共有コミュニティに参加するのか : 質問行動と回答行動の分析　社会心理学研究，*23*(3)，233–245.

宮田加久子 (1993). 電子メディア社会　新しいコミュニケーション環境の社会心理　誠信書房

日本心理学会機関誌等編集委員会 (2015). 執筆・投稿の手びき　2015年版　日本心理学会

Peer, E., Vosgerau, J., & Acquisti, A. (2014). Reputation as a sufficient condition for data quality on Amazon Mechanical Turk. *Behavior Research Methods*, 46(4), 1023–1031. doi:10.3758/s13428-013-0434-y

Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone: The collapse and revival of American community*. New York: Simon & Schuster.（パットナム，R. D. 柴内康文（訳） (2006). 孤独なボウリング　米国コミュニティの崩壊と再生　柏書房）

坂野雄二・福井知美・熊野宏昭・堀江はるみ・川原健資・山本晴義…末松弘行 (1994). 新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討　心身医学, *34*, 629-636.

鳥海不二夫・篠田孝祐・榊剛史・栗原聡・風間一洋・野田五十樹 (2014). 異種協調型災害情報支援システム実現に向けた基盤技術の構築　人工知能学会論文誌, *29*(1), 113-119. doi:10.1527/tjsai.29.113